



ここまで長期化するともう「新型」とは言えないのではないかと思うが、いわゆる新型コロナウイルス禍（コロナ禍）は相変わらず続いており、この編集後記を書いている令和4年9月現在、いわゆる第7波の真っ只中である。以前よりも感染者数も死者数も増えているにもかかわらず、編集子がときおり利用している東北新幹線は、列車によっては満席で切符が取れないこともあるほどに混み合っている。コロナ禍前との違いは、皆がマスクをしているのと、席を向かい合わせにしていないことぐらいである。幸いにも編集子はまだ罹患していない（ようだ）が、第6波あたりからは、身近な人間（家族や同僚など）も感染しており、わが国も「ウィズ・コロナ」のフェーズに入ってきたのかもしれない。

ウィズ・コロナだからという訳ではないのかもしれないが、本誌の編集委員会も、引き続き完全WEB会議で行われている。最近では、出欠確認の際の選択肢から、通常の「出席」がいつの間にかなくなっており、「WEB出席」と「欠席」の2択になっている。学会本部の会議室でのいわゆる「リアル会議」が2年以上ないので、編集子もすでに、本郷三丁目の駅から迷うことなく学会本部に行ける自信がない。

読者の皆様にはあまり興味が無い（まったく興味が無い）ことかもしれないが、昨年の2月号（123巻2号）の編集後記で、完全WEB会議となったことに対する奮闘（？）を書き散らした「昭和世代」の編集子のその後について書こうと思う。

まずは学会側で前回以降に変化した点を2つ紹介したい。

1つめは、会議用のアプリの変更である。コロナ禍が始まった頃はV-CUBEという会議用のアプリを使っていたわれらが編集委員会のWEB会議であったが、現在はWebex（Cisco Webex Meetings）という会議用アプリに変更となっている。利便性はV-CUBEの頃とさほど変わらないが、Wi-Fi環境が悪い拙宅でも、声が途切れることが少なくなったように思う。

2つめは、Web上のグループウェア、desknet's NEO（デ

スクネット・ネオ）という新兵器の採用である。本誌では、通常の投稿論文と同様に、特集論文も査読を行っているが、特集論文のほうは、これまでは事務局が電子メールで査読者に論文を送り、査読者は作成した査読結果を電子メールで事務局に送り返すというアナログな方法を用いていた。しかし、この方法では事務局にも査読者にも負担が大きい。そこで、特集論文の査読を円滑に進めるために導入されたのがdesknet's NEOである。現在のところ、編集子が使いこなせているかはさておき、編集委員会全体としては問題なく運用できているようである。

編集子のほうも、WEBでの委員会にかなり慣れてきた。ちょうど昨年の夏頃、モニター代わりに用いていたタブレットが、寿命のせいか使えなくなってしまったが、その頃にはノートパソコン1台でも、画面切り替えにより支障なく会議に参加できるようになっていた。会議の資料も紙に印刷したほうが良いものと、印刷しなくても何とかなるものが見分けがつくようになり、印刷する紙の枚数がかなり減った（このあたりの事情は123巻2号の編集後記をお読みください）。もっとも、いまだにパソコンの画面で見落としたことに、印刷物を読んでいてはじめて気付くといったことは起こるが、そのあたりが「昭和世代」の編集子なのであろう。

最後に、お知らせを1つ。『精神神経学雑誌』の現在の編集委員は22名であるが、うち半数の委員が11月末をもって任期満了となる。現在、編集委員候補者を募集中である（応募期限は10月31日）。さまざまな分野の先生方を募集しているが、臨床疫学や医療統計学を専門とされる方が現在の編集委員会にはいないので、統計に詳しい先生には是非とも応募していただきたい。

これからの『精神神経学雑誌』を担う、WEB会議をものもしない「平成世代」や「令和世代」の編集委員が増えることを期待している（むろん、編集子のような「昭和世代」の人間もふるってご応募ください）。

山田和男